

# 小学校スポーツ教材の競争性について

長 澤 光 雄 (秋田大学教育学部)

Competitiveness of Games and Sports in  
Elementary School Physical Education Programs  
NAGASAWA Mitsuo (Akita University)

## 1. 目 的

初めて学校に体育関連教科が取り入れられた時代には、その中心は体を鍛える体操であった<sup>3)</sup>。その後時代を経て、楽しむためのスポーツが台頭してきた。1989年に改訂された小学校学習指導要領の体育の内容には、ボール運動の領域で、ルールを工夫したり、簡単な作戦を立てたりしてゲームができるようにすることと、互いに協力し、役割を分担し、勝敗の原因を考え、計画的に練習やゲームができるように示されている<sup>15)</sup>。また、陸上運動の領域では、競争したり、記録を高めたりすることと、勝敗に対する正しい態度がとれるようにすることが示されていて、体育の学習においてスポーツを本来の姿として実践する方向が示されている。さらに、指導要領の具体的な指導の参考資料として、指導資料も小・中学校の各教科毎に1991年に発行された。その中の小学校体育指導資料では、学習指導の方向を示す最初の項で、体育科の目標を解説する際、第一に、各種の運動の学習活動は、他人と競争したりする場面を中心としている<sup>20)</sup>。また中学校指導資料では、体育分野の新しい役割を説いて、21世紀を見通した体育の基本的な方向は、「生涯体育・スポーツへの志向」に集約されると、ここでもスポーツの重要性が高まった認識を示している<sup>13)</sup>。同様の記載が、高等学校学習指導要解説保健体育編体育編にもなされている<sup>11)</sup>。これらのように、体育科でスポーツをより重視する方向が確認される。

しかし、指導要領を解説した小学校指導書体育編で、陸上運動の具体的な指導の内容を示して、競争や記録の達成を目指す学習活動が中心、すなわちスポーツ実践が中心となることを前提としてはいるものの、できるだけ多くの児童に勝つ機会が与えられるように工夫することを提言している<sup>17)</sup>。このことは、小学校段階の体育の学習では、競争をある程度工夫したり変容させる必要があることを示している。これを受けて、前出の指導資料で具体的な工夫や変容の実例を多く示している<sup>24)</sup>。また、様々な体育関連図書の指導実践報告にも、多種多様な競争の工夫の例が見聞できる。その多様な例の中には、工夫の意図とそれぞれの運動の特性との関係が不明確である場合や、変容する前のスポーツの原型からそのスポーツ種目の独自性あるいは競争性が失われる場合がある。例えば、短距離走の技術練習のための楽しい場づくりの中で、クラウチングスタート姿勢から連続跳躍をして、その跳んだ距離を競う競争が示されている<sup>4)</sup>。しかしこの工夫は、短距離走の競争であるか疑問であり、技術の練習となるかも疑問である。また、中学校指導書に跳び箱運動では、単に高い跳び箱に挑むだけでなく、自己の能力や選択した技に合わせて、跳び箱の高さや置き方（縦向き、横向き）を工夫することを求めている<sup>14)</sup>。これは跳び箱運動で、跳ぶ跳び箱の高さを競う競争をしている実態があることを暗示している。跳び箱運動は、跳ぶ高さを競うことに独自性があるとは考えられない。

上記の例等から、スポーツ教材の競争場面について工夫された内容を検討すると、各スポーツの独自性には多面的な要素があることが確認できるであろう。さらに、競争性にスポーツ種目毎の微妙な差異があることも明確になると考えられる。これらの考察により、スポーツを一層深く理解することが可能になり、学習指導を充実させる手がかりとなると考えられる。そこで、スポーツ種目における競争性の差異を明らかにすることを本研究の目的とする。

## 2. 方 法

検討の対象は学習指導要領等の文部省発行文献や、体育の学習内容を解説した図書、体育やスポーツ関係雑誌に掲載された実践報告、体育スポーツ関連学会誌に掲載された研究報告等の文献、それらに記載された工夫や変容されたスポーツの競争の例とする。

一般的にスポーツと呼ばれる運動や競技は多岐にわたり、日本体育学会においてもその定義は定まっていない<sup>30)</sup>。そこで、本研究で検討対象とするスポーツも限定することが必要と考えられる。前出の指導要領では、小学校の体育科で共通に指導する運動には、第5学年及び第6学年で体操競技を基にした「器械運動」と、陸上競技を基にした「陸上運動」と、競泳を基にした「水泳」の3種の個人的スポーツと、2種目の集団的スポーツである球技の「サッカー」と「バスケットボール」がある。また、地域の環境や学校の実態に応じて取り入れるスポーツとして「ソフトボール」、「スキー」、「スケート」がある<sup>16)</sup>。そこで、本研究においてその競争性を検討する種目は、上記8スポーツに限定する。そして、限定された範囲であるが、競争性を明瞭にするために、体育の学習指導で工夫された競争の例を比較しながら検討を加える。

## 3. 考 察

### ①個人的スポーツにおける競争の工夫

小学校指導要領では前述のように、陸上運動の指導において、競争とその競争にともなう勝敗に対する正しい態度がとれるよう指導することが示されている。指導の規準としての指導要領の性格から、競争場面の工夫や変容の実例は見いだせない。

同指導書においては、器械運動は「技」に挑み、それを達成したときの楽しさや喜びを味わうことのできる個人的運動と定義し、その競争は省略している<sup>18)</sup>。高等学校では、発表会などで技を採点して比較する競争を求めている<sup>12)</sup>。小学校で競争を省略し、高校で回復する理由は、児童の精神的発達が背景にあると考えられる。さらに同解説で、公正な態度で他人の技を採点することを求めていることから、主観に基づく評価の困難さが存在することもうかがわれる。この競争を省略した取扱いは、松田の指摘したスポーツの心理的特性の一例である、自己開発性に着目したスポーツの変容<sup>9)</sup>。あるいは、嘉戸の指摘した記録や基準などの観念水準等へ、挑戦することによって経験される運動の楽しさに着目した変容<sup>6)</sup>と考えられる。

同様に、指導書の陸上運動で前述のように、できるだけ多くの児童に勝つ機会が与えられる工夫が求められていた。この工夫を実現するには複数の競争をするか、競争に複数の内容を盛り込むか、またはそれらの両者を取り入れることが考えられる。現実の競技場面でも、予選から決勝と複数のレースを実

施し、参加者の中には予選を勝ち進むことを参加目標にする場合がある。例えば、1992年のバルセロナオリンピック男子400mの高野進は、決勝で8位と敗れたが、準決勝を4位で通過し、夢が実現したと賞賛された。日本人がオリンピックのこの種目で、決勝に進出したことが無かったので、初の偉業と評価され、目標が達成された。8位と敗北したことを、達成された目標によって昇華している。また、対抗陸上競技大会では、個別の競技の入賞順位を得点化して総合順位を競うが、ある競技が個人の競争と、その所属する団体の競争の、複数の競争をしていることになり、競争に複数の内容を盛り込む工夫は一般の競技形態と矛盾はない。

団体競技の競争形態は、体操競技も陸上競技も共に合計得点によって争われる。しかし、個々の演技得点を合計する体操競技と、1位から8位入賞者に、8点から1点などと順位に与えられた得点を合計する陸上競技と相違がみられる。この相違は競技特性となり、競争性の相違にもなる。体操の団体競技では失敗による順位の低下が発現する場合がある。一方、陸上競技では、突然の快挙によっても好成績を上げることができる。体操競技では技の再現性が求められ、陸上競技は偶発的パフォーマンスを期待することも有り得る。

同じく指導書の水泳の領域では、泳ぎを媒介として他人と競い合ったりする、個人的なスポーツであると定義しながら、水という障害を克服する段階があることも示している。このことは、小学校段階の水泳の指導では、泳げるようにすることが中心となることを示している<sup>19)</sup>。ここでは、克服することによって感受されるスポーツの魅力には触れていないが、マッキントッシュ<sup>2)</sup>の克服スポーツのカテゴリーに含まれ、征服または克服した喜びを得られる水泳の一側面を表わしている。これは、器械運動と同様に競争を省略したスポーツの変容と考えられる。

指導資料に記載された学習指導案の具体例をみると、陸上運動では、ハードル走、走り幅跳び、走り高跳びの3種目があげられている。その学習の進め方の中で、「めあて1」に競争することが記載され、競争を含み、それが主となるスポーツとして扱う例を示している<sup>25)</sup>。さらに、活動例として・場所別での競走・グループ対抗戦・ハンディキャップをつけた競走・めやすと記録との差での競争があげられている。この4種類の活動例は、できるだけ多くの児童に勝つ機会が与えられるように工夫することを具体化している。同書の学習過程の工夫でリレーを例にあげ、陸上運動で唯一の団体種目を、後で検討するボール運動の競争の場と同様に設定し、対抗戦や総当たり戦をして、ルールを双方で交渉したり、作戦を立てたりする工夫の例を示している<sup>27)</sup>。さらに同書の評価の工夫で、走り高跳びのノモグラムから、めやすの記録との差を得点化する例が示されている<sup>29)</sup>。このノモグラムは、跳躍成績と関連の高い体力要素である身長と、短距離走タイムから重回帰方程式(式1)を求め<sup>5)</sup>、目標記録を設けた評価および動機づけの工夫である。この目標記録と跳躍記録の差によって競争する場合は、ハンディキャッ

$$(\text{走り高跳び}) = 0.5 \times (\text{身長}) - 10 \times (50\text{m走}) + 120 \quad \cdots \text{式1}$$

ブ同様の意味を持つことになる。同様の50m走タイムによる得点化が走り幅跳びについても示されているが、同じ意味を含んでいる。

同じく指導資料の水泳の指導の工夫で、個の力に応じた学習の場づくりが図示され、競争やリレーの場に、「競争……できる泳ぎで、泳法別など、同じくらいの泳力の子で距離や速さを争う」ことと、

「リレー……同じくらいの泳力の子と行う場」と「泳力のある子、ない子の混成で行う場」が記載されている<sup>26)</sup>。泳力のない子でも、典型的な競争型スポーツであるリレーに参加する場を図示して、競争型スポーツとして実践される状況に指導書より接近している。

水泳の基礎的内容とされる水遊びの中で、「石拾い」に個人やグループで競争をする例が示されている<sup>22)</sup>。水に対する心理的抵抗の除去を競争によって実現しようとする試みであるが、このような動機付けを目的とする競争の導入が時として紹介されることがある。米川は勝率の高い者は勝利達成欲求度が向上し、競争で負けることが多い個人は競争の回避や劣等感が助長されることを指摘している<sup>36)</sup>。この指摘に注目すると、学年進行にともなって体育の学習意欲が低下していくが、このことを単なる活動欲求の低下による影響としてしまうわけに行かないことが理解される。このような動機付けを目的とする競争の取扱は、慎重に検討されなければならない。

前記文部省関係以外の資料から、競争の工夫として公表されている具体例をいくつか検討する。陸上運動の短距離走の「8秒間走」は、単調になりがちな短距離走の工夫として発表され、児童の走能力を把握した後、8秒以内にゴールできるように出発位置を個別に設定し、運動に参加する意欲を高めている<sup>34)</sup>。8秒以内にゴールインすることがねらいで、競争型スポーツの短距離走を、達成型スポーツに変容している。達成することをねらいとすると、パフォーマンスの再現性が達成の要因となる。従って、運動の質と量の充実が促進されることになる。ただ、元の陸上競技の競争性とは異質の競争形態になっている。

出発位置をこの形態と同様にして勝敗だけを競うと、ゴルフのコンペで用いられる場合と同様、勝敗の未確定性を増加させるハンディキャップの設定となる<sup>33)</sup>。ハンディキャップを設定する事は、勝敗の固定化を防ぎ、勝敗の未確定性を保証することである。ハードル走のタイムから同距離のフラット走のタイムをひいてハードリングタイムとし、それを競うハードルの競争も<sup>32)</sup>、フラット走のタイムがハンディキャップの意味を有している。

個人競技である陸上運動を団体戦化した例として、ハードル走のグループ得点争いがある<sup>2)</sup>。前述のように、陸上の団体競技では順位に応じた得点で競争が行われていた。陸上競技は客観的記録が把握できる測定競技で、単一種目であれば体操の団体競技同様に、その記録を合計する団体戦が可能である。しかし、このグループ得点争いの例は、構成員の個別のハードル走の順位を得点とし、その得点合計で団体であるグループの競争を行う例である。これは、構成員の能力とその得点可能性を踏まえた作戦が競争の結果に影響を及ぼす競争形式で、柔道やテニスのような1対1で勝敗を競うデュアルスポーツの団体戦の競争形態の要素を含むと考えられる。

以上個人的スポーツの器械運動や水泳では、学習内容とするにあたり、競争性を排除しているが、唯一水泳のリレーで競争性の回復例が認められる。このことから、これらのスポーツは、競争成立までに獲得すべき技能の存在と、技能獲得の過程における達成・克服の喜びが存在し、競争性が希薄であることを表示している。陸上運動の場合は、測定競技の特性を生かし、適切なハンディキャップや到達可能な目標の設定が可能となり、勝敗の未確定性を拡大したり、達成型スポーツに変容して競争性を希釈している。同様に、測定記録の合計によったり、勝敗の合計によって競争の団体戦化も可能で、そのことによって競争性を希釈している。

## ②集団的スポーツの競争の工夫

1章で示した通り、小学校指導要領のボール運動では、ゲームができるようにすることと、勝敗の原因を考えることができるように指導することが示されている。それとともに、ルールを工夫する提示がされている。本論で検討する工夫は競争の工夫で、ルールの工夫ではない。ルールの工夫にも競争場面に影響を与える場合も考えられるが、競争の工夫とは異質である。従って、個人的スポーツの場合同様、指導要領に記載された競争の工夫例はない。

また同指導書においては、ボール運動領域の内容を解説し、ボール運動はボールを扱いながら集団対集団で得点を競い合うスポーツと定義し、児童の能力・適性、興味・関心等の状況を考慮して、ゲームを工夫し、学習を深めていくことの必要性が指摘されている。この指摘のみでは工夫の実態は明確にはならず、本来のゴール型の球技の競争形態が示され、特に変容はされていない。

さらに、指導資料に記載された学習指導案の具体例もゲームの工夫であって、直接競争を工夫した例はない。競争の工夫に関係する内容には、ボール運動のバスケットボールとサッカーの学習の進め方の中で、「ねらい1」で総当たり戦でゲームをし、「ねらい2」で対抗戦形式で学習を進め、同じ相手と最低2回戦うことがあげられる<sup>28)</sup>。一般に個人競技よりボール運動の勝敗の未確定性は高いので、対抗戦で2回以上対戦することで一度負けたチームに勝つこともあり、競争に対する理解が深まると考えられる。

## ③環境等に応じて取り入れるスポーツの競争の工夫

指導書及び指導資料には、指導要領で加えて指導することができるソフトボール、スキー、スケートに関する記載はない。従って、競争の工夫例も見いだせない。しかしその特性から、ソフトボールのゲーム運営については、同じボール運動のバスケットボールとサッカーについて記載された内容が適用できるであろう。しかし、打撃型の球技であるソフトボールにはバッターとして個人で、守っているチームと対峙しなければならない場面が現れる。そこで、個人的スポーツの競争の工夫に示されたハンディキャップの設定に相当する変容が考えられる。ソフトボールに関する記載はないが、ソフトボールを簡易化した、小学校指導資料の「ゲーム」のハンドベースボールにその例が見られる。投げた球を打てない児童が多い場合は、自分でトスを上げて打つことが示されて<sup>23)</sup>、個に応じた打撃のハンディキャップに相当する変容が見られる。しかしこの工夫は、勝敗に直接関係する競争についてなされた例ではなく、打撃の成績を向上させる可能性を高めると考えられる。プロ野球の場合には、打撃成績を打率でランキングして首位打者を定める競争が存在するが、体育の学習はそこまでする例は見かけられない。従って、前項で検討した集団的スポーツのゲームの工夫で、現象的にはハンディキャップの意味を持つ工夫例となる。

体育の学習としてスキー、スケートが指導される場合は、スキーのアルペン競技とフィギュアスケートの基礎的技術の習得をねらいとする場合が多い<sup>31)</sup>。そしてその学習活動は、元の競技が類似しているアルペン競技と競泳、フィギュアスケートと体操競技がよく似ていて、競争を省略して水や雪を克服したり、技や技術の達成・挑戦に楽しさを見いだす方向で指導がされる場合が多い。また、滑走するこ

と自体の中に、日常生活では経験できない滑るスリル、すなわち幼児が滑り台で楽しむ時と同じ要因が含まれている。従って、競争の工夫に相当する例は殆ど見当たらない。ただ、自校の校庭や裏山をスケートリンクやスキー滑走コース・ゲレンデとして、日常的に利用できる積雪地・寒冷地の場合、滑走時間を測定してスピードスケート競技やスキー競技の競争を学習活動に導入している。ここには陸上運動の短距離走・リレーの学習活動に使われた工夫が応用されている。応用されている現実はあるが、公表される実践報告には、全国共通の内容に関する場合が多数を占め、地方の独自性に基づくこれらの種目の例は少ない。従って、スキーやスケートの競争を実践報告している工夫例は見当たらない。

#### ④スポーツの競争性

2章で示したように、本研究で検討対象とするスポーツは、小学校教材の8競技に限定した。その中のソフトボールも、1996年のアトランタオリンピックから採用され、8競技全てがオリンピック種目であることで、競争性を含む明白な競技スポーツと言える。検討対象のスポーツを限定したが、検討対象とする競争性についても、一般社会や生物学的競争については他に譲り、スポーツの範囲に限定して考察する。スポーツの競争性は、その種目のルールに従ったパフォーマンスの比較により、勝敗が決定する現象をいい<sup>35)</sup>、優秀性の証明や優越性の証明にも役立つものであると言われる<sup>7)</sup>。

そして、機能的特性からみた運動の分類をみると、運動を2分して、欲求の充足と必要の充足に基づくものをあげ、必要の充足に基づくものを体操としている。欲求の充足に基づくもので、挑戦の欲求に基づくものをスポーツとし、模倣・変身の欲求に基づくものをダンスと分類している。さらに、スポーツの一部に勝ち負けを競い合う競争性を含んだ運動がある考えを示し、自然や物的障害を克服したり、記録やフォームを達成する2種類の運動を含め、スポーツの楽しみ方には競争型、克服型、達成型の3種があることを示している(図1)<sup>21)</sup>。

図1 機能的特性からみた運動の分類

- |  |
|--|
| 1 欲求の充足を求めて行われる運動<br>(1) 挑戦の欲求に基づくもの      スポーツ<br>ア 他人に挑戦し、勝ち負けを競い合うことが楽しい運動<br>(ア) 個人対個人      (イ) 集団対集団<br>イ 自然や人工的に作られた物的障害に挑戦し、それを克服することが楽しい運動<br>ウ 記録やフォームなどの観念的に定められた基準に挑戦し、それを達成することが楽しい運動<br>(2) 模倣・変身の欲求に基づくもの      表現運動・ダンス<br>ア 感情や考えていることを動きで表現することが楽しい運動<br>イ 踊り方を覚えてリズムに合わせて踊ることが楽しい運動<br>2 必要な充足を求めて行われる運動      体操<br>体にとって必要なものの種類に応じて分類される |
|--|

このように、ここで検討した競争は機能的特性からみた運動の分類の競争型スポーツの捉え方と一致し、カイヨワの遊びの分類によるアゴン (Agôn) と共通する概念となる<sup>1)</sup>。また、マッキントッシュのスポーツの分類をみると、スポーツの本質的特徴は優越感を得るために、対人的にあるいは非対人的に競い合う競争であるとしながら、相手と接触する特質を持つフェンシングなどは、特別のカテゴリーに分類されることを指摘している<sup>8)</sup>。このカテゴリーに分類される闘技スポーツは、本研究で検討対象とした小学校体育には含まれないので、この競争に関する考察は他の機会に譲る。それより、競争性がスポーツの本質的特徴と指摘しながら、勝利を完結せず、敗北の回復不能性を固定しないプレイエメント、すなわち遊びの要素が内包されていることに触れている。

前章で、体育の学習指導の機能的特性による運動の分類を示した。その中で、達成型の楽しさを主なねらいとする器械運動や、克服型の楽しさを主なねらいとする水泳のように、元は競技スポーツであったが、競争の要素を排除しても楽しむことができるスポーツ種目があった。このことから、これらのスポーツ種目の競争性は希薄であると考えられる。従って、競争性以外の楽しさの要因の一つが、このプレイエメントと考えられる。これらのスポーツ種目では、競争性を排除してもその運動の特性は保持できることになる。

逆に、短距離走やリレーは競争が含まれなければ運動が成り立たないほど、強い競争性を備えていると考えられる。従って、競争性の濃いスポーツと、プレイエメントが大きなスポーツが存在すると言える。競争性の濃いスポーツで勝敗が固定的な場合、競争で負けることが多い個人は競争の回避や劣等感の助長がおこるので<sup>36)</sup>、体育の学習指導においてその問題解決の手段としてハンディキャップを設けたり、団体戦化によって、勝敗の未確定性を高めている。

集団的スポーツであるボール運動は、個人的スポーツより勝敗の未確定性は高いことは既に述べた。従って、小学校体育の3種のボール運動では、競争の単位となるチームにハンディキャップを設ける工夫の例は示されていない。また、パスによるボールの受渡し、シュート成功による喜び、打撃の快感など、個人技能に含まれるプレイエメントの要因も大きい。さらに、複数のチームメートが存在することから、その他者との関わりにおけるプレイエメントの要因も大きい特性を有している。

8秒間走やノモグラムによる走り高跳びのように、陸上運動の競争の工夫が多様な形態を示していた理由の一つは、この種目が測定競技であって、客観的な記録が数値として測定され、比較や統計処理が容易になされるからである。逆に体操競技やフィギュアスケートは、技の難易度に応じた基準点や主観によって採点された芸術点などの合計得点によって比較される採点競技である。この測定競技と採点競技における競争性の差異は、測定競技では序列や優劣が正確に決められるのに対し、採点競技では主観によって得点化しなければならない要素を含むため、完全に正確な評価ができないことである<sup>10)</sup>。しかし、その美しさやすばらしさが正しく理解されれば、運動で要求される合目的性や経済性に対立するものではないが、小学校の学習ではそこまでの到達は困難なため、達成型や克服型の楽しみ方が学習のねらいとなっている。従って、スポーツとして器械運動を理解するためには、見ている他者が注目するようなパフォーマンスの実感が必要であると考えられる。これは採点競技の特性で、これを理解するためには、発表会のような自己を表現する機会を設けること、すなわち競争をすることが望まれる。

#### 4. 結 論

体育の学習において、スポーツを本来の姿として、競争を主なねらいとして実践する方向が示されている。しかし、小学校スポーツ教材の競争を様々に工夫した例を検討した結果、以下の点が明らかとなった。

競争を達成型や克服型に変容したり、工夫された多くの例は、競争性を希釈する傾向がある。そのことから、小学校教材の8競技スポーツに限定はされるが、競争性の濃いスポーツと、薄いスポーツがあることが明らかとなった。

競争性の薄いスポーツの、その楽しさの要因の一つにプレイエレメントの存在が考えられた。プレイエレメントが大きな特徴となるスポーツでは、競争性を排除しても、そのスポーツを楽しむことが可能であった。

また、個人的スポーツの測定競技で競争性の濃いスポーツでは、勝敗の未確定性を保証するためハンディキャップが適切に算出されていた。

集团的スポーツであるボール運動は、個人的競技より勝敗の未確定性が高く、ハンディキャップを設けるまでもなく、競争であるゲームを楽しむことができていた。さらに、ボール運動の特性と集団の特性に起因するプレイエレメントの影響が大きく、ゲームに参加すること自体に楽しさがあった。

#### 引用・参考文献

- 1) カイヨワ, ロジェ 多田道太郎・塚崎幹夫訳 遊びと人間 講談社文庫初版 講談社 1973 p.46
- 2) 池田延行 「障害走の授業づくりに関する研究」日本体育学会第33回大会号 1982 p.822
- 3) 今村嘉雄編 体育史資料年表 不昧堂出版 1963 p.476
- 4) 伊藤宏 天野義裕 細江文利 岡野進編 走運動の授業 体育科教育別冊⑥ 第39巻第6号 大修館書店 1991 p.59
- 5) 蒲地直志 池田延行「走り高跳びのめあての与え方と評価に関する研究」日本体育学会第35回大会号 1984 p.846
- 6) 嘉戸脩「運動の特性と指導」体育科教育 第29巻第3号 大修館書店 1981 p.23
- 7) マッキントッシュ, ピーター・C・ 山下高行 寺島善一他訳 現代社会とスポーツ 初版 大修館書店 1991 p.56
- 8) マッキントッシュ, ピーター・C・ 前掲書 p.57
- 9) 松田岩男 現代保健体育学大系 4 体育心理学 初版 大修館書店 1979 p.93
- 10) マイネル, クルト 金子明友訳 マイネルスポーツ運動学 初版 大修館書店 1981 p.34
- 11) 文部省 高等学校学習指導要解説保健体育編体育編 東山書房 1989 p.8
- 12) 文部省 前掲書 高校解説 p.25
- 13) 文部省 中学校保健体育指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫 東山書房 1991 p.5
- 14) 文部省 中学校指導書保健体育編 大日本図書 1989 p.23
- 15) 文部省 小学校学習指導要領 初版 大蔵省印刷局 1989 pp.99-102



- 16) 文部省 前掲書 小学校指導要領 pp.103-104
- 17) 文部省 小学校指導書体育編 3版 東洋館出版社 1989 p.19
- 18) 文部省 前掲書 小学校指導書 p.18
- 19) 文部省 前掲書 小学校指導書 p.20
- 20) 文部省 小学校体育指導資料 指導計画の作成と学習指導 東洋館出版社 1991 p.10
- 21) 文部省 前掲書 小学校指導資料 p.23
- 22) 文部省 前掲書 小学校指導資料 p.56
- 23) 文部省 前掲書 小学校指導資料 p.60
- 24) 文部省 前掲書 小学校指導資料 pp.63-89
- 25) 文部省 前掲書 小学校指導資料 pp.78-83
- 26) 文部省 前掲書 小学校指導資料 pp.84-85
- 27) 文部省 前掲書 小学校指導資料 p.105
- 28) 文部省 前掲書 小学校指導資料 p.112
- 29) 文部省 前掲書 小学校指導資料 pp.119-120
- 30) 日本体育学会学術用語標準化特別委員会「体育学術用語集」体育学研究第33巻第1号 1988 p.82
- 31) 佐藤光毅 中森孜郎 長澤光雄 久保健偏 小学校中学校体育教育 初版 中央法規出版 1991 pp.223-232
- 32) 関岡康雄 天野義裕 伊藤宏 神尾正俊 陸上運動の方法 初版 道和書院 1987 p.112
- 33) 高尾寛雄 天野義裕 細江文利 岡野進編 走運動の授業 体育科教育別冊⑥ 第39巻第6号 大修館書店 1991 p.39
- 34) 山本貞美 生きた授業をつくる体育の教材づくり 4版 大修館書店 1982 pp.19-82
- 35) 米川直樹 松田岩男編著 新版運動心理学入門 初版 大修館書店 1987 p.235
- 36) 米川直樹 前掲書 p.240